

『ひきこもる小さな哲学者たちへ』

(小柳晴生著、生活人新書〔NHK出版〕2002年)読書メモ

この本は、タイトルからして気に入りました。私もそうなんじゃないか感じていたからです。そして、まえがきで、

『(前略)この本のテーマは、現代の日本社会に生きる私たちが歴史上初めて迎えつつある「豊かさをどう溺れずに生きてゆくか」、「豊かさを生きるにはどのような力や知恵がいるのか」、「それはどうしたら身につくのか」を考えることです(後略)』

とあり、さらに第1章のはじめで、

『(前略)豊かさの中で生まれた子どもたちは、豊かさに適応する知恵の導き手であり大切なパートナー(後略)』

と子どもたちを位置付けて、今、表面上、子どもたちに現れている問題が、現代の私たちに突きつけられている課題を解くかぎになっているとして、この本をはじめています。

しかし、内容は決して堅苦しいものではなく、学生相談カウンセラーとして長年子どもたちの心の声に耳を傾けていた経験が生かされ、実際的でわかりやすいものになっています。学校関係者には特に読んで欲しい本です。以下、私なりにメモしてみます。

この本は、全体的にチャイルドラインに関係していて、是非読んでもらいたいのですが、このメモの中で特にチャイルドラインに関係する部分に下線を引いています。

1章 豊かさを生きる力とは

今の子どもたちがさらされている「豊かさ」という過酷な世界

- ・「あらゆる商品が魅力的に押し寄せてくる巨大なテレビショッピングの世界」
- ・「食べても減らないバイキング料理店」
- ・「物と情報があふれるジャングル」

欠乏を生きてきた世代は子どもたちに、

「何もかもが思うように手に入る豊かな中で、これ以上何が不足があるのか」と言い、豊かさを生きる子どもたちは、

対処しえないほどの物や情報の濁流に襲われ、多様な選択肢に絡みとられ身動きがとれない苦しみを、大人に訴えても訴えても通じないもどかしさに絶望感さえ漂う

豊かさは、満足感や喜びを味わいにくい怖い世界で、毎日洪水のように流れ込む情報大して個人の判断力で太刀打ちするのは困難で、判断停止の状態を生み出しやすい。欠乏を生きるのに役立ってきた「頑張ること」や「努力」という価値観だけで対処しようとしても疲れ果てるだけ。

そういった豊かさを生きる力として著者があげているのは、

1 「あいまいな状況を探索的に生きる力」

困難や苦しみに耐えて進めば目標に到達するという、成功が約束された道はなくなった。

2 「自分とつきあう力」

自分の声が聴こえないとどう進んでいいかわからず途方に暮れる。

3 「自分と折りあう力」

たくさんの選択肢から選ばなかったものをあきらめ、選んだものが思い通りでなかったとしても、その不完全さに折りあいをつけて楽しみを味わう力。

4 「内的な倫理観や価値観、センスに裏づけられた節制力」

関わらない、取り入れない、不要な物は捨てるという、物や情報との新たなつきあいが必要。

結局、大人も子どもも「ゆっくり自分と向き合う時間」を確保することが大切。

豊かな時代は、自信を持ってうろたえること（迷いながら手探りでやっていく姿を隠すことなく誠実にいねいに取り組む）が重要。

豊かさを生きる力をはぐくむ3つの「ぜいたく」。

1 「子どもを信頼し肯定的に見る」

自分を信頼できない人は、他人を信じることはできない。

2 「周囲の大人が大人の都合で子どもをいじり回さない、やりたがることを邪魔しない」

おもしろいこと楽しいことでも、うまくいかなかったり辛抱して取り組まないと越えられない場面にいくらかでも出会う。

3 「子どもが話しかけてきたら耳を傾ける」

子どもたちは、うれしいとき、驚いたとき、悲しいとき、心が疲れたり傷ついたときに、大人にゆっくり話を聴いてほしい。

そして、こういった「ぜいたく」を享受することでしか、豊かな時代を生きる力は身につかない。

2章 「良い子」から「自らを恃む子」に

不登校の子どもに対して、親として大切なのは、先の不安に心をわずらわせるより、子どもが学校へ行かないで何をしようとしているかを理解すること。傷つきや冷たさにさらされる危険に満ちた外界に対処するには、「重いよろい」をつけるか「心の肌着」をつけるかしかないが、「重いよろい」は身を守ることはできても、無骨なよろい姿が人を怖がらせ、人との柔軟なかかわりが妨げられるし、傷つきから身を守ることはできても、寒さや冷たさを防ぐことはできない。人からのちょっとしたねぎらいの言葉や、日々の親子でのさり気ない会話や団らんでの笑い、家庭の暖かさからつくられる「心の肌着」を身に付けさせてあげたい。

子どもが安心して生きていくために必要な自信の3要素。

1 「自分はこの世に生きていてもいい」

この感覚は、役に立つことが何もできない乳幼児期から大人にいたるまで、親や周囲の人から大切にされる中で育まれる。

2 「自分は周りの世界に有効に働きかけることができる」「自分が感じていること、考えていることは信頼できる」

関心を持ったことを追求することや自分がいやなことに対して「NO」と言うことが許容されることで育まれる。

3 「特技や長所を持っていること」

1、2が貧弱だと、ひとなみ優れた特技や長所があっても、全体として不安定になってしまう。カウンセリングは、過剰なほどの「特技や長所に頼る自信」を削って、貧弱な「生きていい」「自分の感覚は頼りになる」という部分を補う手伝いをしている。

昔、大人が子どもの気持ちをわかると思っていたのは、たまたま似た価値観を共有していたからで、現在は価値観が多様化しており、世代間の価値観の相違も大きなものになっている。違う価値観を互いに認め合いながら人と関わることは、精神的な力と成熟を必要とするが、そうした資質が今まで以上に求められている。

すっきりした状態やきっちりした生き方を好む傾向は「強迫性」と呼ばれ、これまで100年ほどの間、社会でもっとも適応的な性格であり、これを高めることが教育の目標でもあったが。豊かな時代を生きていくには、気がかりは気がかりとして心においたまま、少し横に動かして心にスペースをつくり、ほかのことに手をつけたり生活を楽しむ力が必要。学校から帰って宿題をしないで遊んでいる子どもは、そうした時代に適応しているのかも。

成長や変化は望ましいと考えられているが、その本質は今までの自分でなくなることであり、長らくなじんできた自分を失う悲しい作業。カウンセリングは成長を促すのではなく、十分になごりを惜しみ無念さや悔やみを語る時間を確保するもの。

たまには思い切って「ただいま 母親 閉店中」という看板での掲げて、母親稼業を休むのもストレス解消になるかも。子どもにとっても「あなたの良い子であること」を休んで、自由な時間になるかも。

3章 教育が足りないのか、過剰なのか

「甘え」「寂しさ」「悲しさ」「攻撃性」+「性的な関心」(思春期になるとこれが加わる)教育やしつけが多すぎて、周りの期待に応えることばかりしていると、押さえられやすい感情や欲求。例えば、攻撃性は、昔は狩猟や外的から身を守るなど、生きるに必須の能力だったと思われるが、静かなオフィスで働くには折り合うのにやっかいな存在になってきている。それは、幼い頃から乱暴さを適度に外に出しながら、それぞれうまく社会化された方法を出していくすべを身につけるものだが、それは、大人に邪魔されない「子どもの時間」を十分味わうことによって達成される。

変化する社会に適応できていない学校には、「学歴神話」「知性神話」「適応神話」という3つの要素からなっているが、新しい神話が求められている。

4章 カウンセラーから見た「学校の七不思議」

学校制度は近代学校制度が始まって以来100年余りをかけて「学校文化」という独自の世界を築き上げており、最近、学校と社会のずれが大きくなって、スクールカウンセラーの立場から見ると不思議な点がいくつかある。

1 「内履きと玄関」

現在では、公的な建物やビルに出入りするときに靴のまま上がることがあたりまえになっており、今となっては靴を履き替える習慣は、朝アクセルをふかして学校にやってきた子どもたちに、急ブレーキをかけるような役割を果たしているのではないか。学校の主役である子どもが貧相な下駄箱のある通用口から毎日出入りし、外来者のみがきれいで立派な正面玄関を使うのはなぜ？

2 「制服とセンス」

学習院などの私学や師範学校の付属校から始まってあこがれの的だった制服も、TPOに合わせた「ファッション感覚」を磨くことが、これからの時代を生きていくうえで重要になる「センス」という資質を養う場を奪っている。

3 「給食と食欲」

戦後の食糧難から子どもたちを守るという大きな役割を果たした給食も、「いかに少なく食べるかを援助する」という課題をつきつけられている。

4 「修学旅行と楽しみ」

学校文化にはいまだに「楽しいことは学びにつながらない」という風土があるために、

修学旅行の目標にも「集団生活を通じて、規律の大切さを学ぶ」があがっているが、「楽しいことは楽しい、おもしろいことはおもしろい」と素直に表現できる風土をつくることのほうがこれからの時代にはふさわしい。

5 「掃除と精神修養」

「掃除が精神修養につながる」という価値観があるからだと思われるが、精神的な修養は、自ら発願し自らに課して初めて効果をもつものである。

6 「文化のない学校建築」

学校建築がこれからどのように変わっていくかという課題は、私たち大人のセンスと、「何に価値を置いているのか」という哲学が問われることになる。

7 「学校はどうして目標が好きか」

現代社会は、経済成長という大きな目標を達成して、これからどういう方向に向かうかを模索している時期という意味で、大学合格を果たした学生の精神状態に似ているともいえる。今の子どもたち（大人も）には目標に向かってまい進するのではなく、混沌の中から取り組む課題を粘り強く紡ぎだす力やあいまいさの中で自分らしさを結晶化させることが求められている。

5章 「ひきこもり」は哲学である

現代の都市は一晩中まばゆい電飾が消えることがない。精神状態でいえば「そう状態」がずっと続いているようなもの。そんな街にひっそりと閉じこもる若者が少なからずいるというのは、社会全体としては健康なバランスを保っているようにも思える。社会がもう少し明かりをおとして生の陰影を味わうようになれば、ある個人が一身に「閉じこもり」の苦しさを背負うことは少なくなるのかもしれない。

6章 「子どもという自然」とつきあう

家庭というのは、寝たり食べたりする生活の場であり、疲れを癒したり、興味を持つことを追求したり、けんかしたり怒られたり、家族一緒に笑ったり悲しんだりするところで、困難にぶつかったときには、家族それぞれが知恵を出し合い解決しようとするところ。一緒に生活することで身につける知恵や知識や技術はたくさんあるだろうけど、その多くは無意図的であり、結果として教育になっている。子どもが宿題や勉強のことが気になるなら、それは学校の出先機関になってしまう。

子育ては、とかくこざかしく計算しがちな大人に、見返りを求めないで同じ仕事を地道に繰り返す「愚直な生き方」に立ち返らせるという哲学的な意味がある。思いどおりにならないことと折りあってやっていけるようになることが成熟であり、子どもこそ「大人として成熟する」最良の導き手。

子どもは、ごく幼いときから「自分をより良い存在に高めたい」という志向性を内在しているのだから、大人が子どもの声を聴くほど、子どもの心の世界は広く深く豊かになる。つらいことや悲しいこと、苦しいことを持ちこたえられるようになる。もちろん、楽しいことうれしいこともたくさん蓄えておける。大人がしゃべるほど、子どもの心は痩せてゆく。子どもとの関係を修復するために大人から子どもに声をかけようという主張はまったく逆。いま求められているのは、子どもの言葉に静かにうなずく、そんな大人。

7章 不要な「生き方」をいかに捨てるか

子どもには子どもの世界があって、「そこには大人がうかつに入らない、立ち入り禁止である」というわきまえを持つこと。

「心の教育は可能か」という問いの答えは、「心の教育はしてはいけない」ということ。